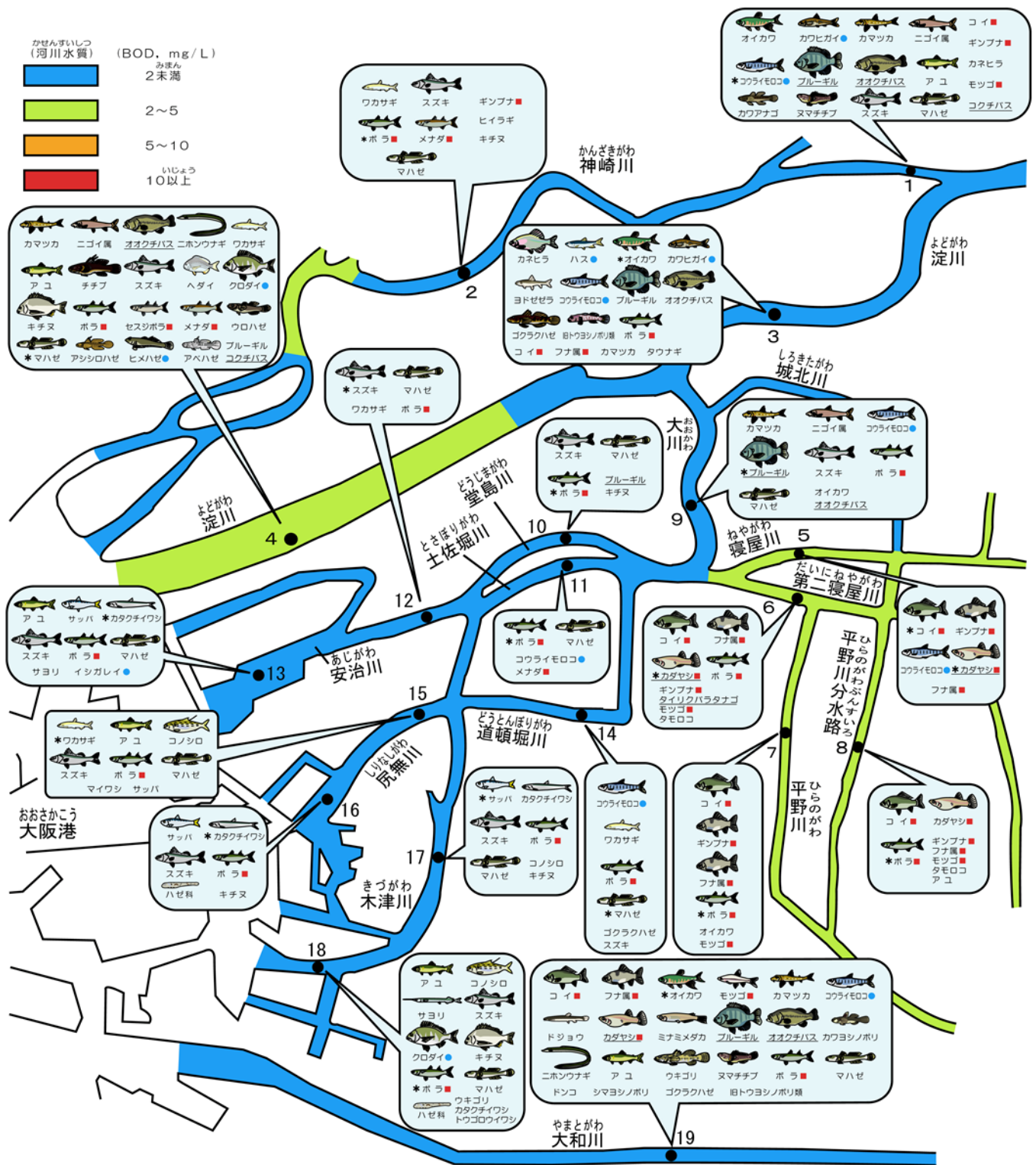


資料 7-9 市内河川魚類生息状況調査結果（平成29年度）

項 目	調 査 結 果
① 調査時期	春季調査 平成29年6月(5日間)      夏季調査 平成29年8月(5日間) 秋季調査 平成29年11月(5日間)      冬季調査 平成30年2月(5日間)
② 調査場所	大阪市内河川 19地点
③ 調査結果の概要	<p>ア. 確認された魚種は52種で、前回調査(平成23年度調査、以下同じ。)と比べて5種増加しました。うち在来種については46種で、前回調査と比べて5種増加しました。また、これまでの調査の中で最多の確認種数となりました。</p> <p>イ. 確認種数が多かった地点は、大和川(22種)、淀川下流(21種)、神崎川上流(17種)、淀川上流(15種)でした。</p> <p>ウ. きれいな水質の指標種の確認地点数は10地点であり、前回調査(11地点)とほぼ変わらない結果となりました。</p> <p>エ. 大阪府レッドリスト2014において絶滅危惧種として記載されている、カワヒガイ(絶滅危惧Ⅰ種)、ドジョウ(同Ⅱ類)、ミナミメダカ(同Ⅱ類)、ニホンウナギ(同Ⅱ類)、ヨドゼゼラ(同Ⅱ類)については、引き続き生息が確認されました。</p> <p>オ. 河口域においては、前回調査に引き続きハゼ類などの底生魚が確認されており、良質な水質状況が維持されています。</p> <p>カ. 外来種については、オオクチバス(ブラックバス)が前回調査の6地点から5地点で、ブルーギルが前回調査の7地点から6地点で確認されており、前回に比べ生息範囲が狭まりましたが、コグチバスが平成3年度の調査開始以降初めて2地点で確認されました。</p>
④ 河川ごとの特徴	<p>ア. 《神崎川》 上流域では、前回調査に引き続き、在来種であるコウライモロコやニゴイ属、オイカワなどが全体個体数の半数以上を占めて最も多くなりました。また、ブルーギルなどの外来種については、個体数、占有率とも前回調査より減少しております。 下流域では、ボラ、マハゼ、スズキなどの汽水性海水魚が最も多く確認されました。</p> <p>イ. 《淀川》 上流域では、在来種であるオイカワの個体数が増加し、ブルーギルなどの外来種については個体数が激減したため、外来種の占有率も大幅に低下しており、在来種の生育環境が改善されていることが確認されました。 下流域では、マハゼ、スズキ、ボラ、キチヌなどの汽水性海水魚が最も多く確認されました。</p> <p>ウ. 《寝屋川・第二寝屋川》 比較的汚濁に強い外来種であるカダヤシが多く確認されましたが、在来種であるフナ属やコイについても引き続き確認されました。また、寝屋川では指標種であるコウライモロコが前回調査に引き続き確認されました。</p> <p>エ. 《平野川・平野川分水路》 前回調査に引き続き、ボラ、フナ属などの比較的汚濁に強い種が多く確認されました。</p> <p>オ. 《大阪市内河川》 大川ではコウライモロコ、マハゼなどが確認されましたが、前回調査に引き続きブルーギルなどの外来種が確認されました。 道頓堀川では、指標種であるコウライモロコの個体数が増加しており、魚類にとって良好な生育環境が維持されていることが確認できました。 安治川、尻無川、木津川など汽水域では、スズキ、ボラ、カタクチイワシ、サッパなど汽水海水魚が多く確認されました。また、マハゼなどの底生魚が、ほぼすべての地点で確認されました。</p> <p>カ. 《大和川》 前回調査と同様、豊かな魚類相を示し、全調査地点中最も多い22種が確認されました。その中には、指標種であるコウライモロコや大阪府内では絶滅危惧種に区分されているドジョウ、ミナミメダカ、ニホンウナギが含まれます。また、本市の魚類調査において、初めてシマヨシノボリやカワヨシノボリが確認されており、水質や底質の改善により魚類にとっての生育環境が向上していることが確認できました。</p>

資料 7-10 市内河川の魚類の分布 (平成 29 年度)



- ・ 河川の BOD は平成 28 年度のデータを使用しております。
- ・ 各地点で確認された個体数が 2 個体以上のものはイラスト付き、1 個体のものは種名のみ表記しています。
- ・ 種名に引いたアンダーラインは、その種が外来種であることを示します。
- ・ (右側に) ● : きれいな水質の指標種を示します。
- ・ (右側に) ■ : 汚濁した水質でも生きられる種を示します。
- ・ (左側に) \* : 各地点において最も個体数が多かった種を示します。